
MAGISTER DEEPER NEGI

ぞなむす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A G I S T E R D E E P E R N E G I

【Nコード】

N 7 1 5 5 S

【作者名】

ぞなむす

【あらすじ】

江戸幕府の初期、歴史の裏側で大きな戦いがあった。ほんの一握りの者しか知らぬその戦いから早400年。今一度裏側に名を轟かせる一人の男がいた。その名は

『鬼眼の狂』

吸血鬼は鬼眼と出会う（前書き）

完全に突発的な衝動で書き上げました。十中八九続かないとは思いますがよろしくお願いします。

吸血鬼は鬼眼と出会う

「もう、お別れみたいね」

「……」

とある一軒家、男の見守る先で一人の女性が今永久の眠りにつこうとしていた。

「色々あったなあ……」

思い出すのは激動の日々。兄の仇を追っていた自分が一人の青年と出会ったことから始まった物語。

その過程で様々な人と出会い、また別れることになった。しかしそこで得た絆は、今の今まで断ち切れることはなかった。

そう、自分たちの歩む道は分かれてしまったが、完全に離れてしまふことはなかったのだ。

「何人かは、先に逝っちゃったけどね」

真に人である者達は皆、既にこの世にはいない。出雲阿国、紅虎、真尋、真田幸村、サスケ、アキラ、梵天丸、灯、朔夜。他にもたくさん仲間がいたが、彼女より長生きな者はいなかった。

そして、あの時の仲間達で最後の人である彼女も、今。

「ごめんね、狂。あなたを残して逝く私を許して……」

「……ゆや」

男、狂が口を開く。普段から無口な彼が、普段呼ばない彼女の名前を呼ぶのは、これが最期だと分かっているからか。

「今だから言うが、俺はお前に出会えて良かったと思っている。お前がいたからこそ、あの日々があったと。だから……ありがとう」

「……うん」

女性、ゆやが狂の言葉にうなづく。

「私からも言わせて。狂、ありがとう。あなたが居たから、私は幸せだったわ」

彼女はそれだけ言うと、静かに瞳を閉じた。それはとても幸せそ

うな表情で。

残された狂の頬には、一筋の光が流れた。

「壬生一族……？」

時は過ぎて20世紀の後半。深夜、西洋風の建物の一室で長いヒゲを蓄えた老人が資料を眺めていた。

「ん？　どうかしたかジジイ」

同じ部屋にはおよそこの部屋に似つかわしくない少女が、備え付けられたソファに寝そべっていた。

「どこかで聞いたことがあるんじゃないが……どこじゃったかな？」

「何の話だ？」

首をひねる老人に少女が尋ねる。老人にタメ口で話す少女というのもまた、あまり見ない光景だ。

「いやな、この壬生一族というのをどこかで聞いたことがあるんじゃないが……」

老人の言葉を聞いて少女は眉をひそめた。

「おいジジイ、ボケたのか？　壬生一族って言ったらあれじゃないか。昔この日本を支配していたという……」

「おお！　そうじゃそうじゃ思い出した！！」

スッキリとした顔になった老人に対し、本当にコイツ大丈夫かと少女は疑問に思った。

「で、その壬生一族がどうしたんだ？」

「もうすぐ世界樹の発光があるじゃろ？　そのときのために昔の地脈の流れを見ておこうと思って先代の学園長の資料を開いたんじゃないが、そこにこれがあったの」

そう言いながら老人は手元の資料を少女に向かって放る。当然、紙は空気の抵抗によって半分の距離も行かず落ちようとするが、不意にその紙が浮き上がり少女の元までゆるりと流れていった。

少女はその紙を手に取り一読する。

「む……」

その内容に彼女は再び眉をひそめた。

「壬生一族が……『ここ』にいる？」

そこには次のようなことが書かれていた。

～麻帆良学園都市内での大規模工事を行う際の注意事項～

・ここ麻帆良学園都市において大規模な工事を行う際は、必ず地脈とその影響を考慮し、学園長の認可を以て行うこと。

尚、以下に1950年当時の地脈の流れを参考として載せておく。

・世界樹、すなわち神木「蟠桃」^{ぱんとう}は周辺地域の地脈の起点となるので、決して切り倒さないこと。

・北部の森には麻帆良学園都市創設以前より壬生一族の者が居を構えているので、なるべく工事を避けること。必要に迫られた場合は、その者の認可を得ること。

・以上のことを踏まえた上で景観、利便性を配慮し……（以下略）

「そうなんじゃ。それで気になってのう」

「壬生一族か……学園都市に住んで15年になるが、まだ私の知らないことがあったとはな」

とうの昔に人々から忘れ去られた過去の遺物。神の如き力を振るったとされる伝説。それがこの麻帆良にいるとは……

少女の口の端が自然とつり上がる。

「エヴァよ、気になるのが分かるが余計なちょっかいはださんでくれよ？そこに書いてあるようにワシらは不干渉を決めこんどるのだからのう」

「それは学園都市の都合だ。私個人で見に行く分には問題ないだろう？学園長」

学園長と呼ばれた老人はやれやれと頭を抱えて唸った。

「……くれぐれも問題はおこさんでくれよ？責任取るのワシなんじやから」

「大丈夫さ。それくらい弁えてるよ」

クククと笑い声を漏らしながら、窓から飛び降りていった。

「……せめてドアから出て行ってくれんかのう」
学園長のつぶやきは誰に届くでもなく消えていった。

「ここか……」

北の森を一時間ほど搜索すると、昔ながらの家屋が見えた。まだ日本が西洋との交わっていない頃の、庶民の住む家が。

そして直ぐ隣には、小さな岩がぼつんと置いてあった。目をこらしてみると、字が彫られているのが微かに見える。どうやら墓のようだ。

「さて、帰るぞ」

「よろしいのですか？ マスター」

側にいる茶々丸が私に問いかけてくる。

「いいんだよ。流石に今の時間から訪問するのは迷惑だろ」

時刻は既に午前1時を回っているのだ。普通は寝ている。私のように宵闇に生きる者でなければ。

「今日は場所を確認しに來ただけだ。明日菓子折でも持って挨拶に來るさ」

何せ相手はあの壬生一族だ。もしかしたら私より年上かもしれない。それに全力を出せるならばともかく封印された状態では太刀打ちできないだろう。

ならばわざわざ夜に訪問して心証を悪くすることもあるまい。そう思い、私は踵を返そうとした。

「っ！！？」

だが、そうすることは叶わなかった。家から放たれたプレッシャーが、あろうことか『闇の福音』と呼ばれた私の体を縛り付けたのだ。

「な、なんだこの殺気は！？」

「ま、マスター！」

声のする方を見やると、茶々丸も私と同様に動けぬようだった。普通機械である茶々丸にこの手のプレッシャーは効かないものだ。

精神を持たない機械には精神的重圧など問題にならない。

それでも茶々丸を捉えているのは、人に近づけすぎた機械の持つ僅かな魂を震え上がらせるほどのプレッシャーだからだろう。

震える私たちを無視するように、ゆっくりと扉が開かれていく。凶悪なプレッシャーを放つ何かが姿を現す。

「オイ、ガキ共。ここに何か用か？」

その姿は、まさしく『鬼』そのものであった。

鬼眼は吸血鬼を邪険にあしらう（前書き）

まさかの続きです。書いてて思ったのがこれ本編に絡むのだろうか……
……っというかその前に連載終了するんじゃないだろうか……

鬼眼は吸血鬼を邪険にあしらう

「……聞いてんのか？」

聞いている。聞こえているとも。ただ……

「あ……あ………」

「ああ？なんだよ？」

声が出ない。体が動かない。呼吸が苦しい。歯の根が合わない。涙がにじんでくる。

久しぶりに感じるこの感覚。『闇の福音』と恐れられていた頃には感じなかったこれは。

『恐怖』

「……ああそうか」

男が一言そう呟くと、私の体を縛っていたプレッシャーが消えた。恐怖からくる極度の緊張から解かれた私は、そのまま地面にへたり込んでしまった。

「ちよつと睨んでやっただけだつつの……」

頭をぼりぼり掻きながら言う男にいいよ私は呆れてしまった。

あれでちよつと？なら本気になればどれだけだというのだ。

「で、何の用だ？」

繰り返された問いかけに、私は呼吸を整え、立ちあがって答えた。

「この麻帆良に壬生一族の生き残りがいると聞いたんだ。折角だから挨拶でもしようかと思ってな。私はエヴァンジェリン・A・K・マグダウェル、よろしくな」

「……そういやここは麻帆良とかいう土地の一部になったんだっとな」

……ボケているのだろうか？ここが麻帆良となったのは100年以上前の話だというのに……。

「しかしわざわざ挨拶に来るとは殊勝な心がけだな。ここの奴でんなことしに来たのは100年ぶりくらいだぞ」

100年ぶり……やはりボケているのか、それとも触らぬ鬼に祟りなしという方針だったのだろうか。ジジイの言からして後者だろうが。

「私は15年ほど前からこの地に封印されていてな。これから長い付き合いになるかもしれないからな」

「……俺はガキに付き合う気はねえ」

「誰がガキだ！私はこれでも600年は生きてるぞ！！」

「じゃあババアか」

「ババア言うな！！」

なんだコイツは！あいつとおんなじようなことを言いおって！！

「とにかく！私が名乗ったんだ。そちらも名乗るのが礼儀だろ！！」

「めんどくせえ……」

「名乗れ！名乗るまで帰らんぞ！！」

そう言っただけなのにドカッと腰をおろしてやると、奴は眉を寄せたため息をついた。

「……狂だ。これでいいだろ。ババアはさっさと帰れ」

「ババア言うなー！！」

奴はもういいだろと言わんばかりに家に入ってしまった。

「マスター、ここは大人しく帰った方が」

「わかってる！全く、なんなんだあいつは！」

自分でも頭に血が上っているのがわかるが、実はそれほど不快にも感じなかった。それは多分面白いやつに出会えた喜びが怒りを上回っているからだろう。

私のような長寿族、それも後天的な長寿にとっての一番の天敵は退屈だ。その退屈がまぎれるかもしれないのなら、今回のことも無駄ではなかったかもしれない。

私は次会った時はどうしてくれようかということを考えながら、鬼の住処を後にした。

忍者は鬼眼に高みを見る（前書き）

久々の更新です。する気なかつたんですが；

忍者は鬼眼に高みを見る

「……」

狂の朝は遅い。彼の朝は井戸から水をくみ上げることから始まる。ザッパーン！！

井戸からくみ上げた冷たい水を頭から勢いよくかぶり、寝ぼけている目を完全に覚ます。これは夏でも冬でも変わらない彼の日課だ。脇においてあったタオルで体をぬぐい、家の中に戻る。そして着換えた後、朝食の準備を始める。朝食には昨日炊いたご飯と山菜の漬物、それに昨日釣った魚を焼いたものだ。

用意したそれを、今度は黙々と食べる。食べ終わると、玄関の脇に置いてある竹竿とかごを持って家を出る。

彼の家から少し離れたところに滝壺が存在する。そこまでの道中で食べられる山菜やキノコ、釣り用の虫、時には獣などを狩っている。

しばらく歩くと、開けた場所に出る。滝の奏でる涼やかな音に満たされた空間だ。彼はそこでいつもの大岩に腰かけ、針に餌を付けて静かに垂らす。

後は日が暮れるまでそこで釣りをするだけだ。ゆやが生きていた頃から変わらない狂の日常。

しかし今日は少し違うらしい。

「御仁、釣れますかな？」

「……そこそこだな」

狂は背後からかけられた声に、振り向きもせず答えた。後ろの気配はそのまま近づき、彼の横に座った。

「ふむ、そんな竹竿で釣るより、素手で捕まえた方が早いのでござらんかな？」

「無粋なガキだな。もう少し情緒ってもんを学んできたらどうだ？」
ガキ呼ばわりされたその少女、体つきを見る限り少女には見えな

いが、はムツと眉を寄せた。

「拙者はもう14でござるよ」

「ハッ！そうやって子供扱いに反発するからガキなんだよ」

その言葉に少女は更に眉を寄せるが、一つ息を吐くと表情を緩めた。

「ここで怒っては自分が子供だと証明してるようなものでござるな」
それからしばらくの間二人は無言であったが、不意に少女が口を開いた。

「御仁、試合をせぬか？」

「あ？」

いきなりかけられた言葉に、彼としては珍しく驚きの声をあげた。
「見たところかなりの死線をくぐっておる模様。拙者も武の道を歩む者として少々興味がござるよ」

そこで初めて狂が少女の方を向いた。そこには呆れの表情が見て取れた。

「力の差もわからねえのか？やめとけやめとけ、俺もお前も時間の無駄だ」

「まあまあそう言わずに。拙者は知りたいのでござるよ。御仁のようなのはるか高みにある強さを体感したいのでござる」

狂はその瞳に、かつての戦友達を見た。どんな強敵の前にも屈さず、強さを求め続けた仲間達を。その情熱を。

彼は知らず知らずのうちに口の端を吊り上げていた。

「おいガキ、名前は？」

不躰に尋ねる彼に少女の眉は再度寄っていく。

「人に名前を聞く時は自分から、と教わらなかったでござるか？」

少女がそう言い返すも、狂は何もせずじっと少女を見つめるだけだった。

少女はそんな狂の態度に諦めたのか、仕方なく名乗った。

「拙者の名前は長瀬楓。甲賀中忍でござる」

「俺は狂だ。少し遊んでやるよ」

鬼眼は忍者と対峙する（前書き）

二ヵ月半ぶりの投稿です。もう忘れられてるんじゃないかな……？

鬼眼は忍者と対峙する

「ちょっと待ってろ」

狂はそれだけ言い残すと、森の中に入っていった。

楓はそれに訝しげな表情を見せたが、5分もしないうちに彼が返ってきた。その手に五尺ほどの棒きれを持って。

「始めるか」

「……待つでござる。それが狂殿の武器でござるか？」

「ああ」

楓は狂の返事に今度は露骨に眉をしかめた。

「随分と舐められたモノでござるな」

「ガキのお守には充分だろ？」

そう言いながら軽く棒きれを振り回す彼に対して、彼女は軽く、ほんの軽くではあるが、憤りを覚えた。

（確かに、実力に差はあるでござるが……それはあまりにも舐めすぎというものでござるよ！）

「行くでござる！」

瞬間、彼女の姿が掻き消えた。一体どこに行ったのか、自然が奏でる音楽以外は何も聞こえなかった。

ただ、そんな状況においても狂は眉一つ動かさない。

（余裕ということでござるか……！）

高速移動中の楓は、そんな彼に自分の中の怒りの火が燃え上がるのがわかった。

彼女は優秀な戦闘力を持つてはいるが、いかんせん精神的にはまだ子供である。自分の中で燃え上がる炎にわずかだが冷静さを欠いてしまった。

それが、命取りだった。

楓はくなくを投げてしまったのだ。本来なら、敵に隙が出来るまで待ち、そこで初めて攻撃を仕掛けるはずだったのだが、その怒り

の炎に一瞬抗いきれず、投げてしまっていた。

といっても、それは巧妙に死角を突いたもので、一般人どころか、ちよっと強い程度の人間なら仕留められるものだった。だが、

彼女が相手にしているのは、まさしく「鬼」だった。

くないが彼に突き刺さると思った瞬間、彼の姿も楓の視界から掻き消えていた。

彼女は腕利きの友人たちと比べても、いやあの高畑と比べてさえ、スピードは負けない自信を持っていた。そんな彼女の目の前で、狂の姿が消えたのだ。

「ま、まさか……」

彼が姿を消す魔法や術を使った様子はなかった。となれば。

「超速で動いている拙者を超えるスピード……!?!」

そんなことを考えている間にも、プレッシャーは増してくる。

「い、いや! そんなことあるはずが……」

「もう終わっとけ」

楓の目の前に、息がかかりそうなほどの距離に、狂が現れた。

そこからは一方的な展開であった。いや、最初から一方的だったのかもしれない。

とにかく、一方的だった。

狂から繰り出される棒きれによる打撃はまさに豪雨のごとく。秒間10発をはるかに超える打撃の内、彼女が防げたのはたったの数発で。

残りは全て、彼女の体に吸い込まれていった。

「がはっ……!!」

彼女の体が宙を舞う。木の葉のように舞った彼女の体は、そのまま滝壺に落ちていった。

(ぐ……このままでは)

溺れてしまう。けれど、この程度で慌てるほど彼女は青くはない。

ダメージで満足に動かない体をなんとか動かし、水辺に辿り着いた。そこには、

「俺の勝ちだな」

こちらに向って手を差し出した、鬼がいた。

「いやゝ強いでござるな。このまさか麻帆良にこれほどの御仁がいたとは」

「……」

闘いを終えた二人は、先程と同じように大きな岩に腰かけていた。もちろん狂は釣りをしている。

「これほど強いのなら噂になってもいいと思うでござるが……『狂』という名は聞いたことがないでござるな」

「……」

「もしかして一人で黙々と修行してたりするでござるか？」

「……とっとと帰れ。もういいだろ」

狂の額には青筋が浮かんでいる。彼としては静かに釣りをしたいのだが、彼女がずっと喋りかけてくるのでそれが出来ないでいた。

「うっ……」

一方楓としてはもっと狂の事を知りたい気持ちはあったのだが、流石に怒らせるのはマズイと感じたのだろう。というよりか現時点で漏らしそうなほどの怒気を向けられているのだが。とりあえず素直に引くことにした。

「わかったでござる。いい時間でござるしな」

楓は岩の上で立ち上がり、お尻を払った。彼女はそのまま森の方へと進んでいく。

ふと、彼女が立ち止まった。

「……また来てもいいでござるか？」

振り返りかけた声は、振り返らずに返された。

「……勝手にしろ」

素っ気ないながら拒否されなかったことに薄く微笑みつつ、楓は

その場を後にした。

それから少しの間釣りをしていた狂だが、先程暴れたせい一匹も釣れなかった。

仕方なく家に帰ると、引き戸の隙間に何かが挟み込まれていた。

「これは……」

それは手紙であった。差出人は

『壬生京四郎』

鬼は京都に赴く（前書き）

とりあえず京四郎の手紙くらいは書いておかないと忘れそう……

鬼は京都に赴く

さて、彼がその手紙を読むのには実に数日間もの時間を要した。それは決して彼の学がないとか、難解な手紙であったとかいう理由ではない。

生来より彼には怠け者の嫌いがある。一時期は、勝手に悟られるからという理由も相まって、喋ることをやめてしまったほどだ。

そんな彼が手紙を読むに至ったのは、薪を使おうとした時に薪の間に手紙が挟まっているのを目撃し（彼はこの段になるまで手紙のことを忘れていた）暇だから読んでみようという気になったからである。そうでなければ薪と一緒に燃やされていたかもしれない。

彼が封を切り、昔ながらの縦書きの手紙を読み進めると以下のようなことが書いてあった。

『狂、久しぶり。元気にしてた？僕は元気だよ。』

突然で悪いんだけど、ちょっと京都まで来てくれないかな？今僕は関西呪術協会ってところにお世話になってるんだけど、その長さんがちよつと手伝ってほしい仕事があるって言うんだ。

本当なら僕一人でも十分なんだけど、折角だから狂も呼ぼうと思って。ほら、狂ってあんまり人の居るところに出てこないでしょ？だからさ、たまにはいいんじゃないかなうって思うんだけど……旅費はこっち持ちだし、給料も出るから悪くはないんじゃないかな？

とにかくおいしい料理とお酒用意してくれるから来てね！

p. s. 天狼は宅急便で京都府〇〇市××に送ってください』

「……あのヤロウ」

相変わらずの彼に青筋を浮かべた狂は、とりあえずそれを火の中に放り込んだ。

とはいっても、狂自身京都に行くことはやぶさかではなかった。

ここ何年か会っていない友人に（彼自身友人と認めるかどうかは知らないし、彼の現在の友人は皆長命であるのですぐさま会いたいということもないが）会う機会であるし、何より酒が出るというのなら行かない理由もない。

普段より山中に引きこもっている狂は、もちろんのことお金をほとんど持っていない。日々の糧を自分で獲る彼がわざわざ人里まで降りる必要はないし、たまに米などを買いに行くときも、いつぞやに裏の仕事で稼いだ金を切り崩すだけである。

当然のことそれでは酒をかう余裕もなく、あつたとしてもわざわざ買いに行くこともない。彼は無類の酒好きだが、だからといって遠く離れた人里まで買いに行くには怠け者の嫌いが強すぎるのだ。

それを関西呪術協会が出してくれるという。関西呪術協会と言えば、彼の記憶の限りではそれなりに大きな組織であつたはず。ならばそこで出される酒は少なくとも狂自身がかうより余程高価なはずである。

彼は薄らと口角を吊り上げ、支度を始めた。具体的には、火を消し、着替えて、ゴミの処理をして、天狼は段ボール箱に詰めた。

狂がいつも来ている服は昔ながらの着ものであるが、人里に下りる時はTシャツにジーンズといった現代風のいで立ちとなる。

今の時代、着物なんぞを着て歩いていると周囲から浮くのは目に見えている。狂はそこまでして着物にこだわる性質でもない。

といっても、彼はもともとが野性的で端正な顔立ちであるので周囲の女性たちの視線を嫌でも集めるのだが。

とにかく、彼が電車や新幹線を乗り継いで京都の駅に着いたのは、もう日がどっぷり浸かった頃であつた。

ずらずらと続く鳥居をくぐって、狂は月明かりに照らされた石畳の上を歩いていた。

ここは関西呪術協会の総本山に続く道である。総本山は長である

近衛の屋敷でもあり、この道は昼夜問わずに人が歩く気配はない。

そんな道をただ一人で歩いていたのだが、

「止まれ」

周囲から、そんな声が聞こえてきた。

鬼は手荒な歓迎を受ける（前書き）

やる気があるうちに更新しとかないとその内止まるので投稿しとこ
う！

しかしこのシリーズどこまでやるかな……

鬼は手荒な歓迎を受ける

囲まれている。

もちろんのこと狂はそのことにとくに気が付いていた。というよりも、周囲から浴びせかけられる殺気はむしろ自分たちの存在をわざと知らしめているように感じられた。

「ここがどこかわかっているのか？」

次にかけられた声は背後からのものだった。声質から男であろうと推測できるその声は、明らかに怒りを帯びていた。

さもありなん。勝手に自分たちの縄張りへ侵入されていい顔をする者もいるまい。

しかし、普通の人間なら縮こまってしまふようなそれを受けても、狂は面倒くさそうに頭をかくだけであつた。

「関西呪術協会だろ？」

あくびを噛み殺しながらぞんざいに放たれた声に、周囲からの殺気は一層強くなった。

「貴様、侵入者か！」

かすかに、ほんのかすかにだが、金属のこすれる音が聞こえた。それは狂にのみ聞こえたもので、彼の経験はそれを抜刀の音だと言った。

つまり、臨戦態勢に入つたということだ。

だが、彼は動じない。武器も持たないこの状況にあつてなお、彼は揺るぎない。

「だったらどうする？」

瞬間、世界が死んだ。

狂の身から放たれる殺気が、世界を殺したのだ。音は消え、わずかに残っていた生物の気配は完全に沈黙してしまった。それは、まさしく世界が死んだと形容するにふさわしい状況であつた。

「あ……ああ……」

「ひい……………」

周囲からうめき声や怯えた声が聞こえてくる。それと同時に何か
が落ちる音も。

かつて、狂がほたると戦った時。彼の殺気はあの猛将・伊達正宗
である梵天丸をして、目を合わせただけで普通の人間を死に至らし
めると言わしめた程のものである。

壬生京四郎の体であった時でさえそれなのである。自分の体を取
り戻し、真の壬生一族としての覚醒、更に紅の王の境地にまでたど
り着いた彼の殺気はいかほどのものであろうか。

今は太平の世である。裏で多少いざこざはあるが、それにしても
かつて程の過激さはない。そんな太平の世に生まれた彼らがいくら
強さを誇ろうとも、激動の戦国時代と壬生一族との戦いを生き抜い
た狂の仲間たちほどに殺気に慣れ親しむことはできなかった。

故に、その場で動けるものは狂を除いて一人もいなかった。

「テメェら、誰に喧嘩売ったかわかってんだろうな？」

更に殺気が増す。先程の殺気で気絶できたものは幸せかもしれな
い。いや、今の段階で気絶できたものも幸福と言えるだろう。それ
ができなかったものは、狂の殺気を全て感じてしまった。

体が震え、齒の音が合わず、失禁してしまったものがある。最早、
戦える状態ではなかった。

そんな彼らに向って狂が一步踏み出したその時、

「ちよつとストップスストップ……！！」

場にそぐわない陽気な声が待ったをかけた。

声の発生源はちよつと頼りなげな青年だった。顔立ちが狂にどこ
となく似ている彼はたはは、と笑いながら狂に近づいていった。

「いやゝごめんごめん。もうちよつと来るの遅くなると思ってたか
ら皆に伝えてなかったんだよねゝ。皆、大丈夫だよ！この人は僕が
呼んだ人でぶべらあ！」

頭をかきながら弁護する彼を、狂は後ろから容赦なく蹴飛ばした。
「いたー！いきなり何すんの狂！」

狂は涙目で訴える彼を、紅く光った瞳で見降ろした。その額には幾筋も青筋が浮かんでいるのが見て取れる。

「……京四郎、覚悟はできてんだろうな？」

誰だって、招待された先でこんな歓迎を受ければキレる。

「え？あれ？ひよっとして滅茶苦茶怒ってたりする？」

『無明神風流奥義・朱雀（無手）』

「ぎゃーーーーー！！」

紅い鳥が、京四郎を襲った。

鬼は旧知と出会う（前書き）

感想をもらえるとやはり嬉しいですね。創作意欲がわいてきます。

鬼は旧知と出会う

「……」

近衛詠春は、口の端をひくつかせていた。

それはズタボロになった京四郎が一人の男性に引きずられているのを見たせいである。

京四郎は普段はふざけているが、彼の知り得る限りで最高クラスの剣士である。全盛期であった自分ならいざ知らず、今の老いた自分では傷つけることすらかなわない。そんな彼をここまで痛めつける常識外の強さに、出迎えの表情が引きつった笑顔になるのも当然と言えた。

「あ、あの……」

「ああ？ なんだ？」

怖い。いかにも不機嫌ですといったオーラが吹き荒れている。

「あなたが狂さんですね？」

「そうだ」

「初めまして、私は近衛詠春といいます。今回、京四郎さんに仕事を依頼したのが私です」

そう言って右手を差し出すが、狂はそれを無視した。そして、不機嫌な声でこういった。

「酒」

有無を言わさぬ口調に詠春の表情が更におかしなものになっていた。流石に出会ってすぐに酒を要求されるとは思ってもみなかった。

「はい、ささやかですが歓迎の宴を用意致しますので、今しばらくお待ちください」

詠春は客人がこれほど早く来るとは思っていなかったの、ほとんど準備していなかった。

だが、ここでそれを言って機嫌を損ねるとどうなってしまうかわ

からない。詠春は近くにいた巫女に部屋へ案内するよう指示し、彼らが退出するのを見た後、すぐさま宴の準備に取り掛かった。

狂が未だへばっている京四郎とともに部屋で休んでいると、先程の巫女が宴の準備が整ったことを告げに来た。

彼はチラリと京四郎を見るとそのまま立ち上がった。どうやら起こす気はないらしい。

巫女はへばったままの京四郎を見て困惑しているが、狂の「ほっとけ」という言葉に押されてとりあえず狂を先に案内することにしたようだった。

狂が宴会場につくと、そこには懐かしい顔があった。

「久しぶりだな、鬼眼の狂」

「……辰伶」

手をあげて挨拶する辰伶に、狂は珍しく驚きの顔を見せた。

かつて狂は彼と何度か戦った。お互いに複雑な事情から色々あったが、最終的には共に戦う仲間となった存在。

以前に聞いた話では確か太四老の地位についているはずであったが……

「なんでテメエがここにいやがる。太四老ってのはそんなに暇なのか？」

そんな狂の疑問に辰伶は思いっきり眉をしかめた。

「一体いつの話をしている。私はとくに引退したぞ」

「おいおい、もうトシか？ 爺になるにはまだは早えんじゃねえか？」

狂はニヤニヤしながら見下すように言う。しかし辰伶はそれを鼻で笑うにとどめた。

「馬鹿を言うな、私はまだまだ若い方だ。というよりか、お前と歳はそう変わらんはずだぞ？」

「じゃあなんで引退なんかしてんだよ？」

辰伶は狂から視線を外し、遠い眼をして語った。

「世代交代だ。400年前に死の病が克服されてから壬生一族には

子どもが生まれるようになったからな。壬生一族が長命だからかどうかは知らないが、出生数自体は少ない。それでも、比較的若い世代が増えてきている」

ならば。

「私のような比較的古い世代が出しゃばる必要はないだろう。かえって害になりかねんからな。今やあの頃の世代で重役についているのは一人しかおらん」

彼らの世代、すなわち400年前の時代を生きていた者のことだ。

「一体誰がやってんだ？」

トキシヨウ
「時晶だ」

「……誰だそいつ？」

「お前な……一番弟子の娘の名前くらい覚えておけ」

狂の一番弟子、その名をアキラという。気まぐれに拾い、付いてくるに任せ、そして背中を預けたこともある男。終生彼は狂を超えることは出来なかったが、それでも凡人の身で手に入れた力はこれらの武士にも真似できないものであった。

時晶は、そんな彼が生涯共にいることになった壬生一族の時人との間に生まれた子であった。

祖母の代から続く「時」の名と、アキラの漢字表記であり氷を操る彼のイメージを表した「晶」という文字を贈られた彼女は、村正の血という類稀なサムライの血と父から受け継いだ冷氣と利発さで瞬く間に太四老の地位に昇りつめた逸材である。性格は両親より祖母に似ており、その力のかつての吹雪をも超えたと言われている。狂はかつて彼女が生まれた時と彼女が太四老になった時になっっているはずなのだが、長い間会っていなかったので忘れてしまっているようであった。

それに辰伶は先程の仕返しとばかりにニヤリと笑って言った。

「それとも、もう耄碌したのか？」

「テメェ……上等だ、表出ろよ」

親指で外を指し示す。それに対して辰伶も立ち上がった。

「フン！いつまでも自分が一番だと思ふなよ。私はあの時から鍛錬を欠かしたことはないぞ？」

「そういうことは俺様を倒してから言いな！」

「ストップストップストップ！もう、喧嘩しないでよ！」

それは京四郎に止められたのだが。

「二人とも血の気が多いんだから……もうちょっと大人しくしててよ」

「……すまない」

「……チッ」

なんとか流血沙汰は回避されたようである。というよりか紅の王（正確にはその力を持つ者）と太四老の二人が激突すれば流血沙汰では済まない。最悪関西呪術協会の本拠地が余波で壊滅する恐れもある。

そういう意味では、京四郎は救世主と言えよう。

「ハハ……元気がいいことで」

苦笑いしながらやってきたのは詠春だ。彼はそれぞれ席に着くよう促すと、自分は盃を持った。

「本日はお越しいただき誠にありがとうございました。仕事の話は後回しにして、まずは歓迎の宴をお楽しみください。では、乾杯！」

「「「乾杯！！」」」

こうして、歓迎の宴が始まった。

鬼は依頼の説明を受ける（前書き）

前話で話に出てきたオリキャラ時晶さんですが、このSSで出番はありません。

鬼は依頼の説明を受ける

色々騒がしかった宴会が終わって次の日。宴会に使われた広間と同じような部屋に詠春とその護衛二人、狂、京四郎、辰伶の六人が円形に座っていた。

「さて、今回お願いしたい仕事というのはこちらです」

詠春は右隣の護衛から封等を受け取り、その中身を彼らに向けて円を中心に置いた。

「ここに写っているのは私の娘である近衛木之香とサウザンドマスターの息子であるネギ・スプリングフィールド君です」

「サウザンドマスター？」

狂は聞き慣れない単語に眉をひそめる。

「ああ、狂は魔法のことに詳しくないもんね。サウザンドマスターってのは本名をナギ・スプリングフィールドって言って、昔の戦争で活躍した人なんだよ」

横から京四郎が説明するが、狂は興味なさげに頭をかくだけであつた。

「あなた達にはこの二人の護衛を頼みたい」

「……何故、と聞いても？」

辰伶は腕を組みつつ、詠春に問うた。写真に写っている二人はどう見ても子供である。だからといって狙われない理由にはならないが、何か明確な理由があるならばそれを聞いておきたかった。それによって護衛の仕方も変わってくるのだから。

詠春はほんの少しの間黙考し、一つ頷くと話し始めた。

「先程も言いました通り、こちらの近衛木之香は私の娘です。私は関西呪術協会の長です。その娘となればそれだけで利用価値が出てしまうのですが、理由はそれだけではないのです」

なぜなら。

「彼女には莫大な魔力が備わっている。その魔力は戦争の英雄サウ

ザンドマスターをも凌駕するほどです。その力を使えば日本をひっくり返すこともできるでしょう」

詠春はそこでわずかに沈痛な表情を見せた。当然だ、自分の娘がそんな宿命を背負って生きてきたのだから。そして、そんな宿命を背負わなければならない娘の心情はいかほどか。

人は誰しも生まれを選べない。それは壬生に生まれた彼らには痛いほど理解できた。

「私は、娘には何も知らず幸せに生きてほしいと思っています。です、娘はそのことを知りません」

「ですが、それは危険なのでは？」

辰伶は思わず低い声で非難した。それは、無邪気な子供が地雷原を走り回ることと同じではないのかと。

「ですが、知ってしまったえば後戻りはできない。もし知らなければならぬのだとしても、それを受け止められるくらいになるまでは」「ごちゃごちゃ言ってんじゃねえよ。要するにそいつを守ればいいんだろ？」

つまらなそうに二人のやり取りを見ていた狂が写真をチラリと見て言った。

「狂」

京四郎の窘める声に耳を貸さず、彼はにやりと笑う。

「他人の教育方針になんぞ興味ねえんだよ。勝手にやらしときゃいいじゃねえか。なあ」

近衛詠春さんよ？

狂の紅い瞳を向けられて詠春はぞっとした。この人は、いや、この鬼は。この時間にイライラしている。

そして、たったそれだけで。彼はここまでの殺気を出せるのか。

(：判断を間違えたか？)

京四郎さんに助っ人を呼んでもらったことを少し後悔した。手札は多いに越したことはないと言張った結果がこれか。

「とにかく、彼女を狙う輩は山ほどいるということです。こちらも

護衛をつけていますが、万が一ということがあります。ですので、あなたの方の内から一人護衛に付いていただきたい。後、これは出来ればなのですが、敵はなるべく生け捕りにしていただきたい」

「どうしてです？」

今度は京四郎が問うた。

「彼女を狙う敵の中には我々関西呪術協会の者もいます。そういった連中は生け捕りにして情報を聞き出したいのです」

「ここも一枚岩ではない、ということか……」

辰伶の呟きに、詠春は申し訳ない、と頭を下げた。その様子に慌てた京四郎が話題を変えようと試みる。

「じゃ、じゃあこっちの子はどういった理由で？」

彼が指さすのは黒の混じった茶髪の少年。

「ああ、この子は親書を持ってきてくれるのです」

「親書？」

「関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪いんですよ、色々あってね。しかしいつまでもいがみ合っているは何の益にもなりません。そこで今回関東魔法協会のある麻帆良学園の修学旅行に合わせ、て親書を届けてもらおうという話になりました」

「それを持ってくるのがこの少年、ですか」

「ええ」

辰伶はそこにも眉をしかめた。先程の近衛木之香のことはまあいい。他人の家庭事情だ、自分がそこまで口を出すものではないだろう。

だがしかし、組織が親書をわざわざ少年に託すのはいかななものか。こんな年端もいかない少年が、そんな重大な任務を任せられて果たして遂行することが出来るのか。

そこまで考えて、やめた。先程狂も言った通り、自分達はただ護衛をすればいいのだ。組織内の事情も分からないのに口出しするのは蛇足というものだろう。

「分かりました。今回の仕事は近衛木之香とネギ・スプリングファイ

「ルド、それに親書の護衛。それでいいですね？」

辰伶が内容をまとめた。詠春がそれに頷くのを見て、さて誰が行くのかという話になる。

「俺がネギ君の護衛にまわろう。二人は木之香嬢の護衛にまわるといい」

「えゝ、狂と？」

「あ？」

「やだよ僕、狂と一緒に護衛任務なんて！」

「俺よりお前の方が狂を抑えられるだろ」

「いや、確かにそうだろうけどさ……」

「なら決まりだな」

「おい、テメェら……」

「ええー！ー！ー！」

「諦めろ」

ガンッ！ガンッ！ー！

「テメェらいい度胸じゃねえか……誰が手のつけられない狂犬だつて？」

「あ、あわわ……そ、そこまで言っていないって！」

「……事実だろう（ボソ）」

「あのゝそろそろ仕事に」

『無明神風流奥義・白虎（無手）』

「」「」「うわあああああああ！ー！」「」「」

辰伶は天狗を訪ねる（前書き）

久しぶりの投稿ですが今回はストーリーに進みません。京都が舞台なので書きたかったです。

辰伶は天狗を訪ねる

早朝。護衛対象とされているネギ・スプリングフィールドがホテルから出てくるまでかなりの時間があるということで、辰伶は山登りをしていた。

「確かこの道をまっすぐだったな……」

彼が今登っているのは鞍馬山。人々の間では、天狗と呼ばれる存在がいると伝えられている。

辰伶は、その天狗に会いに来たのだ。

彼が山道をしばらく歩いていると、少し開けた場所に出た。そこには小さな家屋がぼつんと建っている。

家の主人が無頓着なのか、その家は今にも崩れそうなほど古びていた。

しばらくの間眉をひそめてそれを見ていた辰伶は、家屋に近づきその壊れかけた戸をゆっくりと叩いた。

「はーい、どなたですか」

壊れかけた戸を器用に開け、けだるそうな声で家主が現れた。

「お久しぶりです、庵里殿」

庵里と呼んだその人に辰伶は軽く会釈をする。それを見た家主は一瞬驚いた顔を作るも、直ぐに無表情に戻った。

「おお、辰伶か。久しぶりだな、元気にしてたか？」

「おかげさまで」

「まあ立ち話もなんだ、中入れよ」

「お言葉に甘えさせていただきます」

辰伶が庵里とともに中に入ると、まず小さな囲炉裏が見えた。が、特筆すべきなのはその程度である。他には小さな箆笥がある程度で、ほとんど物といえる物がなかった。

「これは、また、随分と……」

寂れている。辰伶が紡がなかったその言葉は、庵里にはしつかり

と届いていた。

「……まあ、色々あったんだよ」

そう言う彼の表情は、どこか疲れたものであった。だが、それもまた一瞬のこと。

「そうだ、俺の家族はどうだ？ 元気にやってるのか？」

直ぐに表情を戻した庵里は話題を変えた。何があったのか気にはなったが、彼の気持ちを察した辰伶もその話題に乗ることにした。

「手紙をやり取りしていると聞いたのですが」

「いや、やっぱり生の情報を聞きたいからよ」

辰伶は勧められた座布団らしきものに腰かけた。最早綿も柔らかさを失っており布もボロボロなそれだったが、対する庵里はそんなものすらなくそのまま床に座った。

そこまで貧窮しているのかと辰伶は少し心配になりはした。しかし、彼にも事情があるのだろうとあえて聞かなかった。代わりに、

「それもそうですね。あなたのご家族は元気でしたよ。あの人たちは何年経っても変わりません」

やや苦笑しながら言う辰伶に、庵里もそこでようやく笑みを見せた。

「そうか、そりゃよかった」

その後、辰伶が一頻り近況報告などを済ませ、彼が用意した白湯のようなお茶を二人して飲み一息ついた。

「で、だ。なんか用があったんじゃねえのか？」

庵里が窺うような視線を送ってくるが、辰伶は首を振って、

「いえ、京都に来たついでにあなたの顔でも見ておこうと思いましたが」

寄った次第です。辰伶はそう続けた。実際用があった訳ではない。それに庵里は、

「そうか」

と返したただけであった。

辰伶は子供先生と出会う（前書き）

更新が不定期になるのはご容赦ください。

※感想にて質問がありました「天狗ランドが何故倒産したか」という質問にお答えします。天狗ランドは当初、徳川幕府初期の時代には大変繁盛していました。しかし、時代が移り変わり、明治の時代に入ると人々の意識は大きく変わりました。外国より入ってきた科学等の技術に目を奪われ、怪異や超常の存在を信じなくなったのです。すると本物の天狗がいることを売りにしていた天狗ランドからは、次第に客足が遠のいて行きました。それでも訪れる人は少なからずいたのですが、終戦後の高度経済成長の折にケーブルカーが作られる等、鞍馬寺付近の観光地の整備が為されたため、天狗ランドに目を向ける人間はほとんどいなくなりました。庵里はそのことに一抹の寂しさを覚えながらも、寂れてしまった天狗ランドを畳むことにしたのです。という設定です。

辰伶は子供先生と出会う

辰伶が腕時計を確認すると、思ったよりも時間が過ぎてしまっていた。

「すみません、そろそろ時間が……」

彼は慌てて立ち上がり謝罪した。庵里は別に構わないという風に手を上げる。

「忙しいのか？」

「ええ、これから仕事が入ってます」

「そうか、また来いよ」

「今度はあなたの家族と来ることにします。では、また」

辰伶は一礼して、家を後にした。

スケジュールに余裕のない辰伶が急いで山を降り旅館に向っていると、橋のところに一人の少年が立っているのを見かけた。

少年は大きな棒のような物を背負っており、特徴的な黒の混じった赤毛をしていた。

辰伶は懷から一枚の写真を取り出すと、幾度か少年と写真を見比べる。

「もう旅館を出ていたのか……」

そこにいるのは間違いなく今回の護衛対象であるネギ・スプリングフィールドであった。

近衛詠春から聞いていた修学旅行のスケジュールでは旅館を出発するまでまだ少し時間があるはずだが、どうやら少年は先に抜け出してきたらしい。それが教師だからなのか、それとも親書を渡す仕事があるからなのかは辰伶には知る由もなかったが、ともかく入れ違いにならずに済んでほっと溜息をついた。

（狂や京四郎はちゃんと護衛に付けているのだろうか？）

恐らく大丈夫だとは思いますが、少し不安になる。京四郎はともかく

狂はあの性格なので、寝過ごしている可能性もある。庵里に会うために彼らより先に出了た彼には、これもまた知る由のないことである。とにかくそのあたりは気にしても仕方がないので、自分は自分で仕事をすることにした。

「君がネギ・スプリングフィールドか？」

「え？ あ、はい。そうですけど……」

見知らぬ人間にいきなり話しかけられた少年は少し驚いた顔になった。

辰伶はそれを気にせず用件を伝える。

「俺は関西呪術協会の長である近衛詠春から、君と親書の護衛の任を受けた辰伶という者だ。よろしく」

「え！？ ご、護衛ですか？」

「ああ」

辰伶の言葉に更なる驚きを見せたネギに彼はすこし眉をひそめる。

「……もしかして、聞いてなかったりするのか？」

「はい……」

なんとということだ。てっきり近衛詠春から話が伝わっているものと思っていたのだが……。

「まあ、そういうことだ。これから関西呪術協会の本部まで護衛させてもらう」

「やいやいやい！ 俺っちは騙されねえぞ！ アンタ、あの猿の女の一味だろ！？」

そこに、突然第三者の声が響いた。辰伶は少し驚いた顔を見せたが、ネギの方にオコジョを見つけると表情を戻した。

「オコジョ妖精か……」

西洋の魔法使いにはオコジョ妖精などを自分の使い魔とすることがあるのは辰伶も知っていることである。実際彼は何度か実物を目にしたこともある。

しかし、猿の女の一味というのは何のことだろうか？ 疑問に思った辰伶はとりあえず尋ねてみる。

「猿の女の一味とは一体何のことだ？」

「とぼけたって無駄だぜ！そうやって油断させといて親書かすめ取るつもりだろ！？」

「カ、カモくん！」

どうやらオコジョ妖精の名前はカモというらしい、辰伶に真っ向から喧嘩を売る態度をネギが窘めている。

そういった連絡もなしに護衛だと言われても信用できないのも仕方ないが、しかし。こちらも仕事で来ているのだ、はいそうですかと帰る訳にはいかない。

「こればかりは信用してもらおう他無いんだが……ん？」

かなり遠目だが、旅館からこちらに歩いてくる少女達が見えた。旅館に背を向けていたネギも辰伶の視線に気付き、振り返る。

「あ、アスナさん……と、ええ！？」

ネギはまたも驚きの表情を浮かべる。

「君の知り合いか？」

「……僕の生徒です」

「生徒？」

不可解な単語に少し首をかしげた辰伶だが、とりあえずそれは脇においておいた。

今はそんなことよりも彼女達である。ネギの知り合いだということなら少々マズイ。彼女達が全て魔法関係者であればいいが、そうでなければこちらの動きが制限されかねない。かといって、ネギにそれを尋ねる余裕もない。

そう考えた辰伶はネギの肩を叩き、言った。

「ネギ君、こっちだ」

「え？で、でもアスナさん達が……」

ネギはこちらとあちらを見比べて困惑していた。しかし、そうしている間にも少女達はどんどんこちらに近づいてくる。

「いいから早く」

「は、はい！」

「ちょ、ちよつとアニキ！」

辰伶はネギを急かし、彼女達から離れる方へと足早に立ち去った。その際、辰伶の鋭い聴覚が「あ、ネギ！」「あれは……」「あれ、ネギ君どっかいくんかな？」という声を拾ったが、追いつかれる訳にもいかなかったので無視することにした。

「ま、待って下さーい！」

「……ここまで来れば大丈夫か」

念を入れて旅館の最寄り駅の隣まで歩いた辰伶は、そこでようやく歩を緩めた。後ろでは息切れこそ起こしていないものの少々疲れた表情を見せるネギがいる。

「きゅ、急にどうしたんですか？」

「彼女達が君の知り合いなのは分かったが、魔法関係者かどうかからなかったからな。ついてこられないようとりあえず離れることにした。不用意に巻き込むわけにもいかないだろう」

荒事になる可能性があるからな、と今来た道を振り返りながら辰伶は言った。

「……そうですね」

それにネギが少し沈んだ顔を見せる。辰伶はそんなネギの表情をあえて無視し、駅へと促した。

「行くぞ。ここから電車で少し行けば……」

「おい！オイラはまだアンタを信用しちやいねえぞ！」

辰伶達が駅に入ろうとしたところ、再びオコジョ妖精の声が響いた。

「……とりあえずあんまり人の多いところで話さないでくれ。一般人にバレたら面倒なことになる」

「そうだよカモくん、ばれちゃったらマズイよ」

「で、でもアニキ」

再度ネギにたしなめられ涙声になるオコジョだが、ネギに指で口をふさがれてしまう。

「と、とにかく喋っちゃ駄目！どうしても必要な時は小声で！」

ネギはともかく、オコジョは性格に難がありそうだと、辰伶は胸中でひとりごちる。

「まあ、信用できないというのは分かる。しかし証明する方法がない以上、どうすることもできないんだが……」

言いつつ、辰伶はあることを思いついた。

「そのオコジョ、名前はカモだったか？」

「アルベール・カモミールです」

喋れないオコジョの代わりにネギが応えた。

「そのカモミールの話では、俺が仲間だと言って油断させておきながら親書を奪う疑いがある、ということだったな？」

カモが器用に首を縦に振る。それを見た辰伶は一つ頷き、
シュ！

一瞬その手がぶれたかと思うと、次の瞬間には一つの封書が握られていた。

「……え！？あ、あれ！？」

ネギは一瞬呆然とした後、何かに気付いた慌てて体をまさぐった。そんなネギに、辰伶は手に持った封書を差し出した。

「見えたか？」

「い、いえ……」

その封書、親書を受け取りながらネギは首を振る。

「これが証拠だ。俺には、君から力づくで親書を奪えるだけの力がある」

だからわざわざ油断させるまでもない、と。辰伶はいまだ驚愕の色が抜けきらないカモにそう告げた。

辰伶は結界に囚われる

「ここが……」

「そうだ。関西呪術協会の本拠地につながる道だ」

電車で揺られること数十分、辰伶達は今鳥居の前に立っていた。道は先がかすんで見えるほど長く、鳥居は奥に向って数え切れないほど建てられている。

その先が見えない不気味さと、それとは全く逆の神聖さの混じり合った気配に圧され、ネギはぶるりと身を震わせた。

「うう、緊張してきました」

「そう緊張することはない。関西呪術協会の長は温和な人だから、取って食われることはない」

「あ、いえ。それもあるんですけど……敵が襲ってきたりするかも」
ここは関西呪術協会総本山の目の前である。とはいえ、ここで油断することはできない。何しろネギ達が総本山に入ったとなれば敵に打つ手はなくなるのである。その前に仕留めたいというのが敵の本音であろう。

たとえリスクがあろうとも。

「心配するな。そのために俺がいるんだ」

しかし、それを防ぐために辰伶がいるのだ。

いかな敵が襲ってこようとも、守りきる。その意志を示し、そしてネギを安心させるために彼はぽんとネギの肩を叩いた。

「はい、お願いします！」

近くに心強い味方がいることを再認識したネギの、その震えが止まった。

「ここからは少し慎重に行くぞ。俺の後について来い」

「はい！」

勢いよく返事したネギに力強い笑みを向け、辰伶は前に進み出た。

「……」

「……」

鳥居数個ごとに辰伶は身を隠し、全方向を警戒してから先に進む。そして危険がないと判断してからネギを手招きで呼び寄せる。先程からこれを十数回繰り返し返していた。

やがて何事もなく辰伶の体感で道のりの半分を過ぎると、周囲の空気が変わった。

「っ！？しまった、これは……」

「？何かあったんですか！？」

後ろについてきていたネギが緊張した面持ちで問いかけてきた。

辰伶はそれに気を緩めずに答える。

「やられたな。捕縛型の結界だ」

「ええっ！？」

「おいおいマジかよ！気付かなかったのか！？」

ネギとカモがそれぞれに驚きの声を上げた。

結界には大まかに分けて二種類ある。一つは防御型の結界。これは外敵からの攻撃に対して用いられるもので、結界内部にいる者にダメージを通さない。すなわち外から内に入ることを禁ずるタイプの結界である。

もう一つは捕縛型の結界。これは敵を内部に封じるために用いられる、内から外の通行を妨げるタイプのものである。

もちろんその両方の性質を兼ね備えたモノも存在するし、副次的な効果を持つモノもある。

「俺はそれなりに「気」は使えるが、術師というわけではないからな。発動していたのならばともかく、発動する前では感知しようがない」

辰伶が辺りを見回すと、先程まではなかった違和感が感じられた。

「ど、どうしましょう！？」

「落ちつけ。どういう効果の結界かはわからないが、今この時点で何らかの不調を感じないのであればまだ時間的に余裕があるとみて

いい」

もしそうするつもりならばとくにそうしているだろう。

親書が西の長に渡らないようにしたければ、何も奪う必要はない。なくなりさえすればいいのだ。

それこそ、内部を焼き払うような結界であつてもいい。燃えてしまえば、ネギが生きていたところで意味はないのだから。

「こういった結界には基点が存在する。それがモノなのか人なのかはわからないが、それを破壊しさえすれば結界は壊れる」
それに。

「こんな結界が張られれば遅かれ早かれ長も気付く。そうなればいくら人手が足りないとはいえ救援が来るだろう」

しかし、解せない。わざわざ長に気付かれてまでこの作戦をとる必要があつたのか？確かに結界を張れば自分達に逃げられはしないが、その分時間的余裕がなくなるというのに……

「一体どうして結界を……」

「……もしかして」

「？何か気付いたのか？」

神秘的な顔で考え込むネギに辰伶は尋ねた。

「一昨日のことですが、僕達を襲った敵は木之香さんを狙っていました。もし敵の主目的が木之香さんなのだとしたら、この結界は親書を奪いやすくするための者ではなく、僕達の足止めを……!？」

そこまで言ったネギは血相を変えて来た道を戻ろうとした。が、その肩を辰伶に掴まれる。

「待て」

「っ!？離して下さい!早くいかないと木之香さん達が……!」

暴れるネギを離さぬよう、肩を掴む手にわずかに力を込める。

「お前が言ってるのは近衛木之香嬢のことだろう?そちらには他の護衛がついている」

辰伶がそう言うのとネギは驚いた顔になる。

「!本当ですか!？」

「ああ。それも俺より強いだろう者が二人もな」

辰伶は眉をひそめながら狂と京四郎、二人の姿を思い出す。

確かに自分はアレから強くなった。太四老としての仕事の傍ら激しい修業を繰り返し、太四老の仕事の辞めてからも研鑽を積んだ。今では「気」を使った戦い方もお手のものである。

しかしそれを言うなら京四郎も「気」を使えるし、狂もそうかはわからないが400年前のあの時点ではるか高みにいたのだ。

自分が彼らに追いつけたかどうかは、戦ってみなければわからない。が、少なくとも自分よりはるかに弱いということはありえないだろう。

「だから安心していい、というよりかあの二人で無理だったらもう手の打ちようがない」

「そ、そこまでですか……」

ネギが苦笑いしているが実際そうなのだから仕方がない。少なくとも、日本には彼ら以上の実力者はいないだろうから。

「まあ今は脱出に集中すべきだな。敵がこちらを狙っていないとは限らないからな」

「わかりました。すいません、取り乱してしまつて」

ネギは深々と頭を下げた。それに今度は辰伶が苦笑する。

「別に構わないさ。とにかく一刻も早くこの結界を「お」つと、そうはさせへんで！」

その辰伶の言葉を遮ったのは、上から聞こえた少年の声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7155s/>

MAGISTER DEEPER NEGI

2011年12月3日18時54分発行